

ソウル大学 医学歴史博物館(その1) ～韓国の病院と医学校の歴史を辿る:大韓帝国時代～

「世界の病院から」では国立ソウル大(以下、基本的にはソウル大と表記)での見聞を紹介している。No.47はソウル大病院、No.48はソウル大医学部であった。今回と次回では「ソウル大医学歴史博物館」での見聞を軸に、韓国の近代医学史を紹介したい。今回は主として大韓帝国時代(～1910年)、次回が日本統治時代(1910～1945年)である。

「韓国のBig5などの急性期病院の経営は、日本の20年先を走っている。日本にとって韓国の病院は未来病院の姿である」と常々言ってきた。例えば「病院システム丸ごと輸出」、「医療ツーリズム」、「病院ICT化・ペーパーレス化」は紛れもなく韓国の発明である。「ダ・ビンチ手術の活用や手技」は韓国から教わったし、「電子カルテシステム」も同様である。現在は「診療報酬請求のEDI化やレセプトの電子審査」などの医療保険支払いシステムのICT化を教わりつつある。人件費を投入し、人海戦術にて運営している日本の病院経営から見ると、韓国のICT化による医療・病院運営の効率化はすごい。例えばICT化によって、少ない事務員だけで毎日1万人以上の外来を渋滞なく爾々と捌いている(日本の病院に外来が3千人も来ると、診療や事務はパンクする)。「美容整形」はもちろん、韓国のBig5の「臓器移植手術件数」や「心臓手術件数」などは世界トップクラスなのであろう。最新の病院経営や医療での知恵、知識は韓国から日本に流入してきている(逆ではない)。もちろん両国の医療制度は違うし、日本の病院の方が進んでいる点も多い。しかし隣の国、韓国の病院から教えて頂くことはとてもたくさんある。韓国の医療提供、病院経営を理解するためには医学・医療の歴史を知ることは必須である。しかし韓国の医学発展史を知る日本人は決して多いとは言えない。日本語で書かれた韓国医学史の本はまだない(と思う)。短いながらこの誌面をお借りして、見聞記のスタイルで報告させて頂きたい。医療先進国、韓国の医療理解への一助となれば幸甚である。



写真1:ソウル大医学部キャンパスと病院群。中央の木立に囲まれた建物が今回紹介する「ソウル大医学歴史博物館」。その左後ろの高層の建物がソウル大病院本院(ソウル大HPの広報映像より転写)。

ソウル大医学部・病院のキャンパス鳥瞰図を写真1で掲示する。中心にある建物が「ソウル大医学歴史博物館」である。この建物自身が辿ってきた時間軸に沿って、朝鮮、韓国の病院史、医史を紹介したい(この見聞記では太平洋戦争終結までを「朝鮮」、その後を「韓国」および「北朝鮮」とさせて頂く)。詳細は以下で見えていくが、この建物は朝鮮で最も古い近代西洋式病院「廣恵院」を継承する「大韓医院」の本館として1908年に建てられた(太平洋戦争終結以前の朝鮮では「病院(hospital)」は「医院」と表記した)。1910年の日韓併合後は「朝鮮総督府医院本館」になり、「京城(けいじょう)医学専門学校」の臨床教育施設(1916～1928年)でもあった。1928年に京城帝国大学が開学し、以降は「京城帝国大学医学部附属医院」の本館として使用される。日本敗戦後には「国立ソウル大(京大)医科大学附属第1病院本館」、「国立ソウル大(京大)医科大学附属病院本館」、「特殊法人ソウル大(京大)病院本館」(1978年)とし使用され、現在は「ソウル大(京大)医学歴史博物館」となっている。朝鮮、韓国の近代医学のまじく生き証人といえる。

■複雑な朝鮮・韓国の病院と医学校の歴史

李氏朝鮮(朝鮮王朝)では東医(トンイ。明の李朱医学に朝鮮医学を織り込んだ韓医学)が行われていた。韓流のTV医療歴史ドラマに「宮廷女官チャングムの誓い」、「ホジュン～宮廷医官への道」、「東医寿世保元」、「済衆院」などがある。いずれも長編大河ドラマであるので私は観ることが出来ておらず、みなさんの方がきっと詳しい。これらのドラマは李氏朝鮮時代(1392～1910年)の東医の話であろう。現在でも韓国には大学の韓医学部(6年制)で韓方(漢方)が教授され、「韓医師(Oriental Korean Medical Doctor: OMD)」が育成される。約200の「韓方病院」と約13,000の「韓方医院」がある。日本の明治政府は東洋医学から決別したが、アジア主要国には伝統医学を教える大学医学部や東洋医学の医師免許がある。というか、無いのは日本だけである。李氏朝鮮の最期の時期に西洋医学が朝鮮に入ってくる。今回の「世界の病院から」は朝鮮の近代西洋医学の話である。

朝鮮・韓国の病院の歴史と、医学校の歴史はどちらも大変複雑で判りにくい。そこでまず次のごくシンプルに捉えてみる。すると韓国の医学史はかなり整理されてくる。「韓国では最初に病院があった。その病院の流れに、併設医学校や大学医



金城大学 社会福祉学部
社会福祉学科 教授
福永 肇
Hajime Fukunaga

学部が交差したり、離れて行ったりしていく」。

朝鮮・韓国では、20世紀前半の僅か50年ほどの間に、統治者が李氏朝鮮王朝、朝鮮総督府(日本)、アメリカ軍、大韓民国政府と目まぐるしく変遷した。そのたびに病院や医学校・大学の管理者が変わり、病院名、学校名も頻繁に改称された。太平洋戦争の戦前と戦後の大学医学部・附属病院は同じ敷地・建物であっても「非連続」との歴史となった。こういうこともあり、韓国の医学史は複雑になる。

日本や大韓民国が新たな統治者になると、政府上層部はそれまでの統治者の歴史を抹消しようとするケースも見られた。そうなると歴史資料が途絶える。歴史解釈にイデオロギーが影響を与え、政治思想色が付いてしまう。私には20世紀の朝鮮史、韓国史は大変理解しづらい。それは韓国の歴史には以上のような込み入った要因があるからなのであろう。

さらに朝鮮・韓国では記録用文字も半世紀ほどの間に「漢字」⇒「漢字+カタカナ+ひらがな」⇒「ハングル+漢字」⇒「ハングルのみ」と慌ただしく変遷している。韓国の若い人たちは、もう漢字は読み書き出来ないという(1970年に政策上漢字廃止宣言があった)。韓国人が自国の歴史を研究しようとする、まず史料読解でのハードルが高そうだ。私は韓国語には全くの無知で、珍紛漢紛である。ハングル文字は表音文字だそうだ。単語、文章の全てをハングル文字で表記するのは、例えば日本語を全て表音文字のカタカナ表記にするような感じなのであろうか。

私は若い頃に官庁エコノミストとしてトルコの政治経済を2年間調査研究していたことがある(通産省/経済企画庁の中東経済研究所)。トルコは西洋化政策でそれまでトルコ語に使用していたアラビア文字を全て(ヨーロッパ系言語の)アルファベット文字に変更した。すると、西洋人にも単語を読めるようになり、辞書も引け、便利になった。朝鮮語もハングル文字(Korean Alphabet)でなくキリル文字以外のヨーロッパ系言語アルファベットだったら、少なくとも私には便利であった。では日本語はアルファベットにしないのか? 私(1955年生まれ)の世代は小学校の国語の授業にて日本語のラテン文字(ローマ字)での読み書きを習った。ラテン文字で作文を書く宿題があった。先生の「ローマ字はどこの国の言葉でしょう」との質問に真っ先に手を挙げて「イタリア!」と答え、「正解は日本です」と言われ、狐につつまれたような気持ちになったのを未だに覚え

ている。このように日本では日本語のラテン文字化も試みられた。しかし今日、ローマ字で書かれた文章を見ることはないし、ましてローマ字で文章を書くことは全くない。日本語のラテン文字化は定着しなかった。表意文字の漢字で文化を作ってきた民族(実は朝鮮もそうであったのだが)には表音文字は使いにくいのではなからうか。

■朝鮮の病院・医学校の歴史

李氏朝鮮は1876年に開国し、近代化に取り組む。当時の医療は前述の通り、韓医学が主力であった。1881年に日本に派遣団を送り、近代医学の診療所運営を視察する。病院は日本人会が釜山(1979年開設)、木浦、馬山、鎮南浦、元山、白津などに開設している。漢城(現在のソウル)には日本公使館附属医院(1883年)が建った。

1885年、李氏朝鮮最初の国立(外務省管轄)の西洋式近代病院「廣恵院」が開設される。国王高宗の支援を受けた米国プロテスタント教会(長老派教会)の宣教師&医師のH・N・アレンが統括し、開院した病院である。廣恵院は開院12日後に「済衆院」に改称する。済衆院とは、民衆を救う責任を持つ役所という意味である。初年度に10,460人の治療を行っている。患者層は乞食から富裕層まで幅広く、貧困家庭には無料診療を行った。疾病はマラリアがトップで、ハンセン病患者の治療も行っている。それはキリスト教宣教師が医療に臨むときの姿勢であったのだろう。

なお、済衆院の「済」の漢字の訓読みは「スむ」ではなく「スクウ」と読む。例えば日本の恩賜財団済生会(おんしざいだんさいせいかい)は「生命が済(スむ)」ではなく、「生命を済(スクウ)」という意味である。昔話になるが、私は「済生会」という病院名を初めて見たとき、病院なのにどうして「生(命)が済む」という名前なのだろうと、妙な違和感を覚えた。

1889年には国立の近代医学教育(3年制)が開校され、韓国で教育された最初の近代医学の医師54名が誕生する。朝鮮の近代医学の揺籃期である。この学校は後に(「大韓医学校」と共に)1907年に「大韓医院」に吸収される。

李氏朝鮮は1897年に国号を大韓帝国に改めた。1899年、官立「大韓医学校」が開校する。解剖学、生理学、薬理学、診断、内科、外科などの講義が行



写真2:廣恵院(済衆院)。韓国最初の国立の近代西洋医学病院(医学歴史博物館の展示パネルより)。写真16も参照。

われた。初代校長はチ ソギョン(池錫永)である。チソギョンは韓国医学史において重要な人物なので、後で紹介する。大韓医学校にあった内部病院は翌年「普施院」と名付けられ、7日後に「廣済院」に再改称。1902年に臨床教育目的の附属病院が開院する。前述の「廣恵院」から「済衆院」への改称は12日後だったので、「普施院」の「廣済院」への7日後の改称は、おそらくは世界史における世界最短期間での病院名改称であろう。この後も病院名の改称が続く。それによる複雑さが朝鮮医学史の理解を難しくしてしまう。



写真3:「廣済院」。「大韓医学校」の内部病院。廣恵院や済衆院に似ているが別の医療機関。このように朝鮮医学史はややくしく、当初は混乱した(医学歴史博物館の展示パネルより)。

すこしだけ年代を遡る。日本と大清国が朝鮮半島(李氏朝鮮)を巡って1894年から1895年にかけて戦争をする。日清戦争である。日本が李氏朝鮮の王宮(景福宮)を占拠したこともあり、高宗国王は済衆院の運営を米国プロテスタント教会に委託する。病院名は済衆院のままであった。

1904年に米国プロテスタント教会は韓国最初の総合病院「セブランズ(世富蘭偲)病院」を南大門近くにオープンする。この病院は米国クイーンズの実業家(スタンダード石油会社の財務担当役員)で慈善家であるL.H.セブランズからの1900年の寄附基金によって新築された(なおセブランズ病院はフランスとは関係がない。勘違いしそになる)。現在のセブランズ病院は韓国で最も国際化した最先端急性期病院である。もちろんBig5の1つである。現在のセブランズ病院の事業者はヨンセ(延世)大学であるが、セブランズ病院が誇る歴史とブランドを鑑み、ヨンセ(延世)大学医学部附属病院とは決して名付けない。ヨンセ(延世)大学は病院の歴史を「済衆院は新しい病院建物に移転して、セブランズ病院に病院名を改称した」と説明している。1905年、大韓帝国政府が済衆院を米国プロテスタント教会から選取。返還協議書が締結された。その後、多くの日本人の医師が主任医師として済衆院に着任し、医学の西洋化を推進する。また看護婦教育も始まった。日本と朝鮮の医学・病院の近代化黎明期を比較してみると、日本ではオランダとプロシヤの軍医学校出身の軍医たちが医学・病院西洋化で活躍している。他方の朝鮮ではアメリカ人の宣教師や慈善家が登場して病院の近代化に関与する。この両国の近代医学史における軍隊とキリスト教という背景の相違は実に面白い。

大韓帝国では病院開設が続く。1905年に「大韓赤十字病院」が貧民救済目的で開設され、以下1906

年「平壤(ピョンヤン)同仁医院」、1907年「大邱(テグ)同仁医院」。1908年「龍山(ヨンサン)同仁医院」とソウルの「大韓医院」が開院。同仁医院の事業者である同仁会は、表面上は日本の民間の医療事業団体であるが、実態は日本政府の一機関として日本の海外進出を医学と医療の側面から協力する組織であった。政・学・財界が後ろ盾となり、運営費は国庫補助金と寄付金で賄われている。1909年には私立「世富蘭偲(セブランズ)医学校」が設立する。そして1910年に日韓併合を迎える。

■「韓国医学近代化の父」 チ ソギョン(池 錫永)

ここでちょっと脱線して大韓医学校初代校長のチ ソギョン(池錫永、1855～1935年)を紹介しておきたい。彼は「韓国医学近代化の父」と呼ばれている。刻苦勉強の人として韓国で尊敬されている医学者である(写真4～6)。その存在は、幕末の日本の医者、適塾の緒方洪庵に似ているかも知れない。19世紀、伝染病(感染症)を予防する種痘は世界最先端の医学であった。チ ソギョンの師は日本の順天堂医院で種痘法を習った朝鮮人の医師で、種痘の書物も持ち帰って来ていた。しかし書物から学べることには限界があった。チ ソギョンは、種痘接種が日本海軍・陸軍が釜山に開院した病院「済生医院」で実施されていると聞くと、ソウルから釜山まで20日を掛けて歩き、筆談で種痘法を学びたいと申し出た。日本の軍医たちも立派で、チ ソギョンを受け入れ、2カ月間を掛けて無料で種痘法を教える。痘苗と種痘針、各種医学書を提供されてソウルに戻ったチ ソギョンは1879年、韓国人としては初めて種痘を義弟に接種し成功する。長崎の楢林宗建がモーニック株の種痘接種に成功したのが1849年であるから、長崎に遅れること僅か30年後(1796年に英国の外科医ジェンナーの種痘成功から83年後)の話である。翌年、チ ソギョンは日本に渡り、種痘苗の製造技術を習得。朝鮮帰国後に種痘所をソウルに開き、医療活動に従事する。1899年に朝鮮最初の官立大韓医学校の初代校長に就任する(以上は広島県福山市在住の医師、石田純郎先生の『釜山の済生医院』 新見公立短期大学紀要 第26巻、2005年、pp.35-42を参照した)。



写真4:ソウル大医学部キャンパスの中心に建つチ ソギョンの立像。日本の医療人もこの朝鮮の医師の名前は覚えておきたい。